

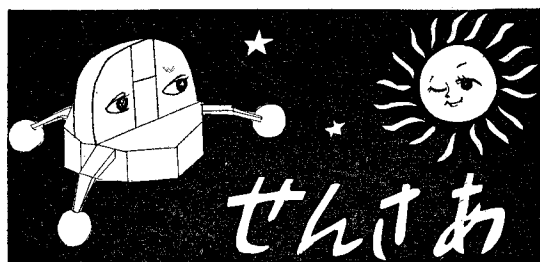
宇宙塵を海底から採取して放射能を測定して、 10^6 年の時間尺度の太陽系の歴史を調べる話もあった。地球の年齢が 45 億年であるという根拠についての論争はずっとつづいた。

地球内部の層構造の形成について、核の形成の時期、地球の内部の熱的歴史、化学組成からの地球のモデルの話。又、地球の大気の話、海洋の海水の歴史、地球型惑星の内部の熱的歴史のモデル計算、月面の観察から推定される月の歴史、月面の赤外線観測から推定される月面物質、というように非常に多方面の研究が、非常にゆるい形で、太陽系の起源というテーマで結び合わされていた。太陽系の起源論が、地に足をつけて育ちはじめたといっているのではなからうか。近く「科学」（岩波）誌上で特集が行われ成果が発表される。（蕙）

爆発する恒星状電波源？

キットピーク天文台のリンツによると、18 等級の恒星状電波源 PHL 5200 のスペクトルは輝線より短い側に 100 乃至 150Å もある広い吸収帯を示し、通常の輝線をだす源の外側に、およそ 1 万 km/s 位で広がっている層があるらしい。又同定された線の視線速度は 3 つのグループにわかれ、ライマン α を含む速度が系全体の速度を表わすと考えられるが、あとのものをどう解釈したらよいか、まだ明らかでない。とにかくこの PHL 5200 に於ける現象は非常な速度を示し、又恒星状電波源の中でも例外に属するので、何か爆発現象の結果をみていることは確かであろうと彼は結論している。

(Ap. J., 147, 396, 1967) (成相)



ながらも、楽屋裏的存在として表面に出ることもなく、また報われることも少なく長年を過して来た人々の中から選ばれた栄えの 6 名中の 1 人が平さんである。本人は“あたり前のことをして来ただけであり、受賞の知らせを受けてびっくりした”と述懐している。

平さんの功績は緯度観測用の天頂儀を常時整備し、また付属マイクロメーターにミクロン大のくもの糸を縦横 14 本張り渡すという際どい芸当をやったのけ、精度の高い緯度観測を支えて来たとなっている。くもの糸もそこらに見かけるものでは使いものにならないので、山林を歩きまわって越冬用の特殊なくものまゆを採取することから始まるので、並大ていの苦勞ではない。まゆの採取にせよ、くもの糸の張り渡しにせよ、注意深く根気強い人なら、やってやれないことはないが、要はこのように精根を使い果すような細かい、しかも地味な仕事を進んでやるかどうかである。平さんは、進んでこの仕事を引受け、しかも今日までの 40 数年間の毎日を楽しみながら過ごして来たというから、その心構えも人なみではなく、今回受賞の原動力になっていると考えてよい。

大正 12 年、当地の高等小学校を卒業するなり緯度観測所機械工見習として勤務し、お師匠の榊老人に厳しい訓育を受けた。加えて持ち前のきかぬ気から独学を進め、今日では機械工作、電気はいうに及ばず建築、土木その他諸般についてのエキスパートになっている。自分が努力苦勞して成長してきただけに後進の教育にも極めて厳しく、手を取り足をとって教えるということはない。もっと自ら苦勞工夫して身につけよ式であるので、時折不満の声を聞くこともあるが、それは平さん自身の信条であり、それなりに尊いものである。

◆アマチュア天文研究発表会。去る 5 月 14 日（日）、日本天文研究会と川崎天文研究会とが共催で東日本アマ

◆萩原雄祐氏及び池田徹郎氏に叙勲。元東京天文台長萩原雄祐氏にこのほど勲一等瑞宝章が贈られた。またもと緯度観測所長の池田徹郎氏には勲二等瑞宝章が授与された。これは多年にわたる天文学への貢献に対して授与されたものである。

◆末元善三郎東大教授に今年度の学士院賞。末元氏は 1949 年頃よりフレヤーのスペクトルを東京天文台の塔望遠鏡で撮り始め、温度の精密な決定、微細構造の発見等幾多の貢献をしている。また太陽光球についても、ケンブリッジ天文台で行った光球の乱流の研究は多くの文献に引用されている。今回の授賞の対象になったのは直接には彩層の研究であって、高温説低温説に決着をつけて低温説を実証し、更に彩層の乱流速度分布を初めて組織的に研究した。更に自らの考案になる斜入射分光器を南太平洋の日食へ持って行き、見事な閃光スペクトルをとり、先の乱流分布の研究を精密化して、いわゆる彩層の‘Suemoto Model’を提唱するに至った。また、これを星の彩層の研究及び太陽の UV スペクトルの研究へと枠をひろげ、今後の成果も大いに期待される。

◆平三郎氏に吉川英治賞。去る 4 月 11 日、第 1 回吉川英治賞が緯度観測所の平三郎氏に贈られ、私共は心から、おめでとくと申上げる。選考経過にも明らかのように、日本文化の向上につくし讃えられるべき業績をあげ

チュア天文研究発表会が川崎市産業文化会館で催された。これは天文アマチュアに発表の場をつくり、資料を交換し、研究を公開することによって、アマチュアの活動を伸ばそうという目的をもったもので、20の研究発表があり、地元のほか仙台、諏訪、名古屋、岐阜などから約250名の参加者があった。

◆「天文大学院生の会」発足。1966年天文学会秋の年会以後準備が進められていた「天文大学院生の会」が、天文学を志す大学院生のあらゆる意味における接触の場をもつことを目的として発足した。この会においては、研究情報の交換、若手の交流の促進、将来計画への参画、勉強会についての予備的討議、研究環境の整備（奨学会、災害保障等）、名簿作りなどの活動が計画されて

いる。会員は、天文学に関係のある大学院生の任意加入で、会費は半年200円である。全体的な集りは、天文学会の年会（年2回）の際に行なうが、通常の活動は事務局がセンターとなって進める。事務局は任期1年で、1967年度は東大天文学教室が担当する。係は田中(D1)、冨野(M2)、谷川(M1)、米山(M1)である。

学会だより

奨励研究生募集 42年度の新規奨励研究生を募集致します(3名)。応募資格は原則として天文学コースのある大学院修士課程の学生とします。詳細は各支部理事におたずね下さい。

西村製の

30cm 反射望遠鏡

下記へ納入して好評を博しております

- 米 ゴッダード・スペース・フライト・センター
ハインド JR短期大学
ムレ大学
- 英 オックスフォード大学
- スイス バーゼル大学



30cm 反射望遠鏡

ニュートン・カセグレン兼用

株式会社 西村製作所

京都市左京区吉田二本松町 27
電話 (77) 1570, (69) 9589

昭和42年5月20日

印刷発行

定価100円

編集兼発行人

印刷所

発行所

東京都三鷹市東京天文台内

東京都港区西新橋1丁目21番8号

東京都三鷹市東京天文台内

電話武蔵野45局(0422-45)1959

広瀬秀雄

東京学術印刷株式会社

社団法人日本天文学会

振替口座東京13595